

ああ、相談業務

～有希さんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

有希さん家族

有希さんと出会ったのは、彼女が中学校1年生の時である。

当時は、父、母、兄、妹、第二人の7人家族であった。父は当時42歳、母は38歳、兄は中学3年生、妹は小学校3年生 弟たちは4歳と2歳であった。

相談が始まる

相談が始まったのは、有希さん（以下本児）の不登校が理由である。

学校から、「本児が弟たちの面倒を見るために

学校に来られない様だ。保護者を呼び出そうにも、中々連絡は取れないし、取れたとしても『忙しいから』と言って来てくれない。母親の弟の所も緊急時の連絡先になっているが、そちらも連絡が付きづらいという。兄の方も登校できていない。どうしたらよいか？」という相談であった。

小学校からの情報でも、休むことが多かったそう。理由は家庭の事情や体調不良で、その割には、公園で本児が弟たちと遊んでいる所を見かけることもあったという。本児の学力は低めだが、特に問題はないレベル。妹は登校できているようで、学力は低いということであった。学習の準備も十分ではないが、宿題などは何とかやってくるとのこと。

まだ2歳、4歳の幼児もいるので、保健師からの情報を得た。小さい子のいる家庭の場合、保健師は多くの情報を持っている。

ここで初めて家族の様子がもっと詳しくわかってくる。

父親は母親の第三番目の夫で、本児と兄は第一夫の子でもう一人上に19歳の男の子がいる。妹は第二夫の子、そして下二人が今の夫の子であるという。直ぐ近くに住む母方叔父は父子家庭。母方祖父母は既に他界している。

母親が一番下の子を産むときは、自宅分娩であったこと、健診や予防接種は殆ど受けていない事など、保健師の方でも要注意で見ている家庭だということも分かった。ただ、本児については年齢が高く、また、5年前に転入しており、その前の情報は無かった。養父の仕事は建設業、母親はパートとなっているが、下の子たちは保育所を活用しておらず、職業不詳と思われるとの事。本児の叔父の所の子二人は小学校2年生と保育園活用中の5歳とのことで、この子たちの母親は離婚して遠方にいるようだ。

更に地域の民生・児童委員の方にも聞いてみると、やはりこの家庭のことは気になっていたとの情報で、子どもたちだけにいることが多く、一番上の子もふらふらして学校に行っていないのではと心配していたという。

はてさて、これは結構ヘビーなケースだと情報収集の過程で思った。どうしたらこの家庭に介入していけるのだろうか？

学校に行けていないということから、本人との面談や保護者との面談をまず考えた。本人にいきなり関わろうとしても、大抵の場合は会ってもらえない。例えば、家庭訪問をしても、玄関はしっかり締まっていて、ピンポンしても誰も出てこないのが普通である。保護者が仕事に行っている間、玄関対応はしなくてよいと言われているからもあるし、不登校の子どもが多くが、人見知りが強いか、対人恐怖の傾向を持っているからでもある。学校には来ていないので、学校で会うわけにも行

かない。

小学校の情報では時々公園で弟たちを遊ばせているというので、公園をはってみるか？それともいきなり家庭訪問をしてみるか？保健師に同行させてもらうか？迷った挙句、とりあえず家を見に行ってみようかと午後早い時間に家庭訪問をした。

二階建てのアパートが二棟あり、そのうちの棟の1階の一つが本児の住まいであった。

行ってみるとなんとドアが開いている。初夏の天気の良い日だったせいもあるのかもしれない。ピンポンをするが音が鳴らない。玄関の三和土には、大ききの異なる靴がところ狭しと脱ぎ散らかされていた。耳を澄ますと子どもの声も聞こえずひっそりとしているので、誰もいないのかと思いつつも、玄関から「こんにちは」と声を掛けてみた。

中から小さい子を抱えて出てきた女の子は、何も言わずに怪訝そうな顔を向けてきた。細くてちょっと色黒な、大人しそうな女の子。これが本児であった。

いきなり会えて、びっくりしたのはこちらも同様だったが、そこは気持ちを抑えて、穏やかに「こんにちは。市の家庭児童相談員の河岸由里子と言います。初めまして。有希さんかな？」と尋ねた。本児はコックリと頷いてくれたので、「少しお話ししてもいいかな？」と玄関の靴を少し除けながら玄関に入ってみた。

玄関からは居間というか、10畳くらいの部屋が全て見渡せた。家の中には、小さい子のおもちゃが少し床に転がってはいたが、家具らしきものは殆どなく、段ボールにお菓子が山のように入っていてパチンコの景品かなと感じた。

本児に、お父さんやお母さんのことなどを尋ねると「お父さんもお母さんも仕事に行っている。」とのこと。そして、父母の帰宅はまちまちだが夜7時ごろに帰ってくることに、本児が子どもたちの面倒を見ていて、ご飯も結構作っていること、学校には行きたくないわけではないが、子守もある

ので行けないこと、そして兄は学校に行ったふりをして物置に隠れたりしていることなど聴くことが出来た。

そこにもう一人上の弟が昼寝から起きてきた風に出てきた。本児の大変さを思い、「忙しいだろうから、今日はこれで帰るね」と伝え、母親とも一度お話ししたいからと名刺を渡して帰ってきた。

本児は日中の家事・育児を一人で担っている。父母は一体何をしているのか？もしかしたらパチンコに明け暮れているのではないだろうか？何としても母親と会わなければならない。次回は夜7時頃を目指していこうと心に決めた。

その後10日ほどして、再度訪問した。きっと母親からは冷たく対応されるのではと思いつつも、今回は父母が居そうな時間帯でと思い午後7時頃にうかがった。アパートについてみると、玄関は半分戸が開いたままで、相変わらずの状態。玄関から声を掛けてみた。

出てきたのは、ふくよかなお母さんであった。「先日お邪魔した市の家庭児童相談員の河岸と言いますが、ちょっとお話しさせていただいてもよろしいでしょうか？」という、「あ、娘から聞いてます。この間はいなくてすみません。」とやけに愛想がよく、こちらがびっくりした。ニコッと笑うと前歯がない。奥を見るとお父さんと思しき人もうろうろしている。

母親に「奥にいるのはお父さんですか？」と聞くと、父親（以下養父）がそれを聞いて会釈してくれた。養父は、細身で、日焼けしているのか色黒な方である。こちらも「こんばんは」とあいさつを返した。

ここで母親に今日訪問した理由をお話する。私「先日お邪魔させていただいたときに有希さんとお話ししましたが、小さいお子さんの面倒を見ていて、しっかりしていますね。ただ、学校に行く年齢ですので、出来れば下のお子さんたちは保

育所を活用するなど考えていらっしゃるのかなと、お母さんやお父さんのお考えを聞きたくて訪問させていただきました。何かお困りのことがありましたら、出来ることお手伝いさせていただきますが。」

母親「保育所も考えたけど、朝早く出るものだから、送っていくことが出来ない。娘も学校にあまり気持ちが向いていないし、だったら見てもらおうということになって、そのままずるずるとして、申し訳ないとは思うけど……。最近では本人も学校に行きたいとは言わないし。兄の方には行くように言っているけど、行きたくないらしく、学校の時間帯に私が帰ってきたりすると行っていないことがばれると思って逃げ隠れする。」私「お母さんたちの仕事の勤務時間はどんな感じですか？」

母親「私は朝7時から大体午後3時ごろまでで、父親も私も出かけるのは朝6時頃だけと帰ってくるのは夜7時くらいかな。父親は現場なので帰りはまちまち。」

（この母親は午後3時に終わってから夜まで一体何をしているのか？やはりどうもパチンコくさい。）

私「朝早いんですね。お母さんは何のお仕事ですか？」

母親「工場です。」

私「早出遅出のある工場なのでしょうか？随分早いですね。」

母親「そうなんです。」

私「遅出に替えることとかはできないのでしょうか？」

母親「それだと、夜結構遅くなってしまうので。」

私「なるほど。朝のお出かけ時間がそれでは中々保育所への送迎ができませんね。保育所は申し込んでいるんですか？」

母親「いいえ。待機が多いと聞いているし。」

私「それでも申し込んでみませんか？もし近くの保育所に入れたら、朝の送りだけ誰かに頼むとかできないでしょうか？」

母親「弟に頼むかな？隣にいるけど、父子で、自分の子だけでも大変だから余り頼みたくはないけど。」

（本当に頼めるのかな？）

私「有希さんやお兄さんが学校に行けるかどうかは別として、下のお子さんたちはやはり保育所を使わないと大変では？とりあえず入れるかどうか、市の方でも確認してみますか？」

母親「お願いします。」

私「ではその結果をまたお知らせに来ますね。」と次回の訪問の約束を取り付けて、今回は早々に引き上げた。あまり長居をすると面倒くさがられることも多いし、あれこれ言うと、これまたうるさがられるので、保育所に入れない、諦めている、という話から、困っているかどうかは分からないが、困りごとに対処すると言う体で関わられるようになっただけで良しとした。

転機

翌朝、役所に行くと、昨晚の状況を上司に報告し、保育所に子どもたちを何とか入れられないかということになり、保育課に確認したところ、事情も事情なので、近くの保育所に入れてくれることになった。こんなにトントンと上手く進むことはまずないが、たまたま空きがあった。

その情報を持って早速その晩訪問し、保育所に入れることを伝えた。手続きのこと、保育料のこと等を説明し、母親か父親のどちらかが手続きできるかどうか確認した。母親の仕事が終わってからも手続きには行ける。収入は二人合わせてもそれほど多くないので、保育料は大したことはない。手続きをお願いしたが、こういう人は大抵手続きが中々できないことが多い。そこで手続きにも同伴してお手伝いしますよと伝え、役所で明日夕方4時という約束まで取り付けた。約束を守ってくれるかは不安だったが、準備するものなども一応伝え、母親はまあ何とかなるだろうと言っていた。

翌日夕方4時に役所で待っていたが、中々来ない。電話をしても繋がらない。結局その日はすっぱかされた。仕事帰りに再び家に寄ってみるが、母親の姿は無い。いたのは結局有希さんと子どもたちだけ。

その後保育所の手続きまでに、1週間ほどかかった。それでも本当に手続きが出来て良かった。近くの保育所なので歩いていける距離。両親がしっかり送迎してくれるかどうか、保育所と確認していった。本来中学生が送迎することは認められていない。本児が迎えに行っても引き取れないことは伝えていたので、何とか遅れながらも叔父が送って行ったり母親が迎えに来たりと言うことが定着していった。そしてこの間、母親の了解の元、たびたび訪問し、本児や下の子たちと話したり遊んだりして本児との関係を深めて行った。

小さい子がいなければ、本児は学校に行けるはず。しかし、長いこと学校に行っていなかったために、いざ行ける状況になっても足が向かない。当時はまだ、不登校のための適応指導教室などは出来ていなかったため、まずは担任の先生との面談を設定し、付き添った。初めて学校に行った日は、緊張のあまり泣き出してしまった。ハンカチを渡し、大丈夫だよと声を掛けながら、担任や校長先生とあいさつをして帰ってきた。担任がまたとても優しい先生で、個別に対応して下さったこともあり、少しずつ学校に慣れていった。一方兄についても同様に進めて行きたかったが、兄は筆者との面談も拒み、逃げ回っていて、関われずにいた。

結末

ようやく本児が少し学校に行き始めたころ、兄が家出をし、補導されるという事態が起こった。養父に学校に行かないことを叱責され、殴られたことが原因だった。母親も兄の扱いには困っていて、養父が殴っても仕方がないとの捉

え方であった。虐待も今ほど重視されておらず、躰の一環としての体罰が普通に行われていた時代である。それでも殴るのは問題ではということで、児童相談所も巻き込み、兄の一時保護と発達検査を行うことが出来た。兄も家に居たくない状況だったし、養父も母親も対応に困っていたことがこの機会を設けることに繋がった。検査の結果、兄の方は軽度の知的障害がわかり、手帳を申請し、その流れの中で、施設活用へと進んでいった。良く話をきくと、兄は度々養父にも母親にも叩かれていて、本児はそういう兄や両親を見て、率先して子どもたちの面倒を見ていたことが分かった。

こうして、本児は中学に少しずつ通うようになり、兄は施設活用、弟たちは保育所活用と言うことで、子どもたちの見守りがしっかり出来るようになって終結した。

その後この家族は別の地域に引っ越してしまった。叔父さんから情報を得ていて、本児は定時制高校に進学し、卒業して働いているとのことだった。更に数年ほど経った頃、叔父さんから連絡があり、有希さんが遊びに来ていて会いたがっているとのこと。仕事帰りに寄る約束をして訪問した。9年ぶりに会った有希さんは結婚し、赤ちゃんも生まれて、素敵なお母さんになっていた。引っ越した後どのような生活だったかは聞かなかったが、今幸せだということを引き安堵した。彼女は最後に、筆者が以前涙をふくために貸したハンカチをその時律儀にも返してくれたのだった。

まとめ

本ケースの様に、次々と離婚再婚を繰り返し、そのたびに子どもが増えていく家族に度々出会う。パチンコで出会いを作っている人も多い。一方で、離婚再婚を繰り返さないまでも多産の家もある。

子どもたちが沢山いても、一人一人をこそそ

こ育てているのならケースとしてあがってくることはない。我々支援者の元が上がってくるケースは、今で言うネグレクトなどで、一人一人を丁寧に育ててはいない。本児の様に学校にも行かせず、弟や妹の面倒を見させているのは問題となる。本ケースでは、上手く本児や保護者と関わることが出来たが、こんなに上手く行くことは少ない。大抵は何度も拒否に逢う。それでも他機関と連携しつつ、根気よく、粘り強く、かつ役に立つ形で介入して行けば、どこかで関わるチャンスが生まれる。余計なお世話かもしれないが、子どもたちを支援するためには諦めるわけには行かない。

もう一点、思ったことがある。それは、「時代」である。昭和の初めであれば、このケースの様に、小学生でも学校に行かず、下の子を負ぶって家事を手伝ったりしている子ども達がいた。そのころであれば、このケースも特に問題とはされなかつただろう。「時代」と共に、何が問題視されるかは変わっていく。我々支援者は、その時代の流れに沿って、変っていく社会の情報を正確に持ち、相談者に的確に伝え、子どもたちが困らないように支援内容を吟味していかなければならない。そして、子どもたちが、次の世代に伝えていくものが、次の世代にとっての親子関係の支障にならないように見て行くことが必要である。。